

28、 三願転入

祖師聖人は化土巻に、十方衆生の入信の道程を三願転入を以て指示していらるる。
「愚禿釈の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化によりて、久しく万行諸善の仮門を出
でて、永く双樹林下の往生を離る、善本徳本の真門に廻入して、ひとへに難思往生の
心を発しき、しかるに今ことに方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり、すみや
かに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲す、果遂の誓まことに由あるか
な、ここに久しく願海に入りて深く仏恩を知れり、至徳を報謝せんがために、真宗の
簡要を撫うてつねに不可思議の徳海を称念す。いよいよこれを喜愛し、ことにこれを
頂戴するなり」と。

然るに浄土真宗に流れを汲む道俗は他力廻向の言葉に誤魔化されて実地の求道を忘

れ、唯観念の遊戯に終つて、他力が無力に成っている。

私が総会所で布教している時、雲山和上が度々参詣されて、「大沼さんあなたの布教

は説教ではないね」「何ですか」「御示談だ、人の聞きたいと思う処を自分で自問

自答しているのだ」「そうですね」「時に大沼さん 私が本山で昨日説教した時、今

総会所で大沼が説教しているが、あれは腰を据えて聞かねば判らんぞ、第十八願を向

うに眺めて丸々他力の丸ごかしにしない、唯になるまで実地に求めよと、三願転入の

腹で説教しているから、その積りで聞かないと 味がとれないぞと、言つとききました」

「有難うございます」

法龍の腹は 定散の自心に迷うて金剛の真心に昏い第二十願の法頓根漸の自惚道俗

に対して 真仮の分齊を明瞭に説示しようと努力しているのだ。無帰命安心に成つて

いるのが可愛相だから機受の信相を明らかにして上げるのだ。死後の往生のみを夢見

ているから 現生不退の有ることを教えて上げているのだ。観念の遊戯ばかりしてい

るから実機が流転するぞと突いて上げるのだ。

三経、七祖、祖師の著述が、皆三願転入の意味で、真仮の分齊を鮮やかに説いて有るのに頭だけは第十八願の積りで自惚れているが、腹は第二十願の入り口に立つてゐるのだ。

真仏土巻に

既に以て真仮皆是れ大悲の願海に酬報せり 乃至 真仮を知らざるに由て如来広大の恩徳を迷失す

和讃に

念仏成仏これ真宗

万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして

自然の浄土をえぞしらぬ

この念仏成仏これ真宗の中に、死後に眺めた第二十願の念仏と、仏智満入で諦得した第十八願の念仏の有る事を知らないから 他力不思議の境地が受取れないのだ。 仏智の仕組が方便より真実に誘引しようとしてあるのに、道俗は自惚れて、すんだ積りで墮ちて行くのだ。

僧侶よ、学問も必要だが実地の体験は猶必要だ。七里和上は学問は槍の柄、信仰は穂
 先と言つていらるるが、私は学問は定規、信仰は剃刀と言つ。布教使も左の凶面を諦得
 して同行がどの程度にいるかを注意して布教しなさいよ、効果が拳がるから。

三願

三經

三藏

三門

三機

三往生

第十九願

觀經

福德藏

要門

邪定聚

双樹林下往生

第二十願

小經

功德藏

真門

不定聚

難思往生

第十八願

大經

福智藏

弘願

正定聚

難思議往生

これを六三分別と言つて浄土真宗の綱格をなすものだ。實地に求道して行く時、

第十九願

法が自力
修諸功德

要門
邪定聚

機が自力
至心発願

(法機俱漸)

大衆圍繞

雜行

第二十願

法が他力
植諸徳本

真門
不定聚

機が自力
至心廻向

(法頓根漸)

不果遂者

雜修

化土往生
三不
果因

第十八願

法が他力
乃至十念

信後
一念の信

弘願
正定聚

機が他力
至心信樂

(法機俱頓)

若不生者

專修
二信
報土往生
果因

信前
自力の心(疑)

後の因に依つて説明すれば第十九願の開設が觀無量壽經、これを善導大師は要門と教え、要は肝要、要、八万の法蔵は觀無量壽の觀の一字に納まる肝要、門は通入の義で出入が出来る、門を出れば六度万行となり八万の法蔵となる、門に入れば定散二善から念仏一行に通ずるのである。

願文には法を修諸功德と説き、機を至心発願と教え、諸々の功德を拡ぐれば諸善万行となり、此の中に万行随一の念仏も納まる。この自力の善根を策勵して至心に発願して往生を願うから法機俱に自力であり、漸進しか出来ないから法機俱漸と言ひ、利益としては大衆に圍繞せらるるけれども、聖人はこの桁の人達を邪見が去らないから邪定聚の機と教え、修相は如実でないから、結果としては、仏の入滅を見る双樹林下の化土往生を得るのである。此の桁の人達は、善根功德を修していると思つてゐるけれども、浄土往生の資助に使うから之を第十八願から見て雑行を雑修していると選捨するのである。

(註) かなりの学者でも雑行雑修の事を 神道の祈り祈祷をしたり、御札や御籤など

を貰う事を雑行雑修と説明しているが、それは絶対に誤りである。あれらは神道の行事であつて当宗から彼是言うべき筋合いのものでない。雑行雑修とは当宗内の善根功德を踏み台にして往生を願う物柄を雑行と言ひ、念仏修する修相について機執が去らないで、助正をならべて往生の助けにするのを 雑修と言ふのだ。

合点で通つてはいけない。実際に修してみよ。弘法大師の所謂「名利の為に千金を投出すは鬚を撫でるよりも易く、慈悲の為に一錢投出すは生爪を抜くよりも難しい」の言葉の如く、実際、名誉を得る為か、利益を得る為には 湯水のように使ひながら、慈悲の涙は注がない、善根を積まずに果報の来る筈がない。失敗だらけに気がついた時、自力の善根では立派な証果は得られないと気がついた時、第二十願の門に入るのである。第二十願の開設が阿弥陀經、この意味を善導大師は真門と教え、真は真実と続く字であるけれども、まだ機執が去らないから 法の真実の真を取つて 機の未熟を顕して実と言わぬのだ。門は通入の義で要門より漸進して弘願に通入せしめようとの思召しから真門と言つたのだ。

願文には法を植諸徳本と説き、機を至心廻向と教え、諸々の徳の根本を植える。聖人は善本徳本は弥陀の名号なりと仰せられてあるが、善本徳本の名号を修習しながら機功を募るから折角の他力廻向の名号も至心に廻向する自力廻向の柀に墮ちるのである。

だから法は他力で、機は自力の法頓根漸であり、利益としては第十八願の境地まで果遂せしめずには置かない徳は有るけれども、修相のいかんによつて往生の定不を決めようとしているから 不定聚の機と言ひ、結果としては難思往生の化土往生を得るのである。第十九願の邪定聚の機の双樹林下の往生に較ぶれば勝れているから難思の二字が与えてあるけれども、第十八願の正定聚の機の難思議往生に較ぶれば程度が低いから議の一字を欠くのである。この柀の人達は万行超過の名号に眼は注いでいるけれども、前三後一の助業を以て往生の資助とするから名号特異の腕を發揮せず、雑修となり、又専修も柀を落として五専各修となり、機功を募るから僣慢となり、機執が捨たらないから自力の心と教えたのである。この自力の心の有る間は仏力に乗托してい

ない、信順しんじゆんしてないのだから疑うたがいの心こころと言いつたのである。

だから蓮師れんしの「もろもろの雑行ぞうぎようざつしゆじりき雑修ざつしゆ自力じりきの心こころを振り捨すてて」と仰おほせられたのは、浄じよう土門内どもんないの第十九だい、第二十だいの観小かんしやうりやうきやう兩經りやうきやうの桁けたを離はなれて第十八だいの大經だいきやうに入れ、これ方便ほうべんより眞実しんじつに帰きせしむる果遂かすいの願功がんこうである。だから三願さんげん転入てんにゆうをしない者ものはいないのだ。自分じ分ぶんは一度いちどで第十八願だいじゅうはちげんに帰入きにゆうしたと思おもっている者は憍慢きやうまんの自惚うぬぼれなのだ。

第十八願だいじゅうはちげんの開設かいせつが大無量壽經だいむりやうじゆききやう、これを善導ぜんどう大師だいしは弘願くわんと教おしえ、十方衆生ぼうしゆじやうびやうどう平等びやうどうの証しやう果かを得うるから弘ひろい願がんと言いわれたのである。果遂かすいの誓ちかひによつて漸進ぜんしんした機類きるいは仏智ぶつち不思議ふしぎによつて自力じりき淨じやう尽じんし、一念いちねんの信しんを諦得たいとくし信前しんぜん信後しんごの水際みずぎわ鮮あざやかに、ここに唯信ゆいしん独達どくたつの法門ほうもんを發揮はつきすることが出来るのである。

願文がんもんには、第十九だい、第二十だいの行前ぎやうぜん信後しんごなるに異ことなり信前しんぜん行後ぎやうごである。機きは至心ししん信しん樂ぎやう、己おのれを忘わすれた他力たうりきの無我むがであり、法ほうは乃至ないし十念じゆねんで他力たうりき廻向えきやうの名号みやうごうが徹底てつていして信海しんかい流出しゆつの称名しやうみやうとなつたものである。法ほうも他力たうりき、機きも他力たうりき、法ほうも本願ほんがん名号みやうごう正定業じやうじやうぎやう、機きも決定けつじ往生じやうおうの正定じやうじやう聚機じゆき法ほう俱頓きとんの絶対ぜつたい他力たうりき、これを一向いやく專修せんじゆの行者ぎやうじやと言いい、利益りやくとしては

若^{にやくふ}不生^{しょうじや}者^{しや}、報^{ほう}土^ど往^{おう}生^{じやう}疑^{うたが}いなし、これ^を難^{なん}思^し議^ぎ往^{おう}生^{じやう}と^い言^いつたのだ。これ^を正^{しやう}信^{しん}偈^げの道^{どう}綽^{しやく}章^{しやう}には

三^ぶ不^ふ三^{しん}信^け誨^{おん}慤^{ごん}

と^い言^いい、源^{げん}信^{しん}章^{しやう}には

專^{せん}雜^{ざう}執^{しゅう}心^{しん}判^{はん}淺^{せん}深^{じん}

報^{ほう}化^け二^ど土^{しやう}正^{べん}弁^{りゅう}立^{りゅう}

と^お仰^{おほ}せられてあるが、真^{しん}宗^{しゅう}の道^{どう}俗^{ぞく}よ、自^{うぬ}惚^ぼれが強^{つよ}いのだ、他^た力^{りき}が無^む力^{りき}に成^なっているのだ。其^その儘^{まま}が我^{わが}儘^{まま}になり、唯^{ただ}が槍^{やり}放^{つばな}しに成^なっているのだ。易^{やす}い易^{やす}いで誤^ご魔^ま化^かされなさんな。合^が点^{てん}なら易^{やす}いが実^{じつ}地^ちとなれば難^{むずか}しい。而^{しか}し苦^く抜^ぬけした後^{のち}は易^{やす}いと言^いう言^{こと}葉^はまでいらない易^{やす}さだ。

真^{しん}宗^{しゅう}の人^{ひと}々^{びと}よ 根^{こん}本^{ぽん}から間^ま違^{ちが}つていないか、基^き礎^そに狂^{くる}いが有^あるから、完^{かん}成^{せい}しないのだ。聖^{しやう}道^{どう}門^{もん}は易^い信^{しん}難^{なん}行^{ぎやう}であり、浄^{じやう}土^ど門^{もん}は難^{なん}信^{しん}易^い行^{ぎやう}が宗^{しゅう}の据^すわりだ。難^{なん}信^{しん}難^{なん}行^{なんぎやう}の宗^{しゅう}旨^しもなければ易^い信^{しん}易^い行^{ぎやう}の教^{おし}えもないのだ。

君^{きみ}達^{たち}は聖^{しやう}人^{にん}様^{さま}の御^ご苦^く勞^{ろう}の話^{はなし}を聞^きいて 法^{ほう}を死^し後^ごに眺^{なが}めているのだから糠^{ぬか}喜^{よろこ}びだ。

観念の遊戯に終つて生活とは何等交渉を持たないのだ。表看板は立派に真俗二諦、現当二世なんて掲げているけれども、真諦門が徹底していないから俗諦門がわやだ。此世はどうもなれないのだ、死にさえすれば五十二段なぞと、とぼけるな、因果が矛盾している。現当二世にならないではないか。

真諦門とは精神的の満足であり、俗諦門とは肉体的の活動である。精神を離れて肉体がなく、肉体を離れて精神がない。信仰を離れた生活もなく、生活を離れた信仰もない。清く正しく進め。宿業宿業と言つてずるけてはならないぞ。

今日のこの日は再び来ないのだ。人生受生の甲斐が有ったか。世間の人様の御恩に報いたか。そんなすさんだ生活で仏様に申訳が有るか。

十方法界我物なり。感謝の言葉も南無阿弥陀仏。懺悔の言葉も南無阿弥陀仏。